

事後評価好成績からの思い出

非文字資料研究センター センター長／神奈川大学 21 世紀 COE プログラム 拠点リーダー

福田アジオ

2003 年度から 5 年間展開してきた私たちの 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、昨年 3 月に多大の研究成果を挙げて終了した。その成果については、当事者が自画自賛するだけでなく、COE 事業を推進した 21 世紀 COE プログラム委員会が詳細に点検し評価することで、社会的に認知されることとなっていた。2008 年の年の瀬が迫った 12 月に、待ちに待った私たちのプログラムについての事後評価が公表された。

事後評価は「設定された目的は十分達成された」というものであった。評価としての文言は素っ気ないものであったが、これは評価の 4 段階のうちの最高の評価であった。私たちのプログラムは「学際・複合・新領域」の分野において採択されていたが、この分野の全部で 25 件のプログラムのうち、この評価を受けたのは 6 件であった。単純に解すれば、上位 4 分の 1 に入る好成績だったといえよう。5 年間がんばってきた甲斐があったと言って良いであろう。しかも、公表された『平成 15 年度採択拠点 事後評価結果報告（概要）』のなかで、分野毎に「プログラムの取組例」が特記紹介されたが、私たちのプログラムは学際・複合・新領域の取組例 4 つのうちの一つとして取り上げられ、紹介された。

この事後評価を得て、このプログラムに参加して下さった皆さんの 5 年間のご苦労は無駄ではなかったといえる。反省するに、皆さんには無理難題ともいえる要求をした。21 世紀 COE プログラムは、いくつものテーマを設定して、共同研究を展開してきた。学際・複合・新領域は、共同研究が殊に期待され、また要求される分野であった。しかし、私たちのプログラムの中核を担う研究者は人文科学に属する人が多かった。人文科学では研究は個人で行い、仮に研究の過程で他の研究者と協力することがあっても、成果はあくまでも個人として出し、個人に属するという考えが強く支配してきた。5 年前を振り返れば、その個人研究中心の考えがもたらした不協和音の大きかったことが改めて思い出される。しかし、

2 年目、3 年目とプログラムが進行するなかで、次第に共同研究にも慣れ、共同で研究し、共同で成果を挙げることに疑問を感じる人も少なくなった。その結果、共同研究としての実をあげ、20 冊近い最終成果報告書の刊行として見事に結実した。

さらに、思い出すに、申請段階の皆さんのご苦労が昨日のごとくよみがえってくる。2002 年 9 月に申請することが計画された。そのため慌ただしい日々となった。歴史民俗資料学研究科で 3 人の検討委員が選出され、計画作成にあたった。橘川俊忠、中島三千男、福田アジオであった。3 人の度重なる検討の結果、歴史民俗資料学研究科と日本常民文化研究所の実績を前提にして世界的研究拠点を形成できる課題は「非文字」しかないということになった。それを具体化する過程で、香月洋一郎、佐野賢治、田上繁が加わり、そして中国言語文化専攻の皆さんの協力を仰いだ。申請書作成には、日本常民文化研究所の職員の皆さんにも加わっていただき、まさに昼夜兼行の作業であった。特に、予算の積算作業は、私たちにはあまりに巨額であり、慣れない仕事であった。職員の方々の緻密な計算があって、間違いのない計画書が作成できたといえる。連日、風邪をおして出勤し、夜遅くまで取り組んだことが懐かしく思い出される。

事後評価の好結果を得て、5 年間の事業について思い出すことは多い。事業推進担当者、共同研究員、COE 教員、調査研究協力者の皆さんが、共同研究に邁進されたこと、国際シンポジウムや公開研究会に参加して下さった世界各地の研究者の皆さんが himoji を高く評価して下さったこと、そして PD、RA として研究に加わった若手研究者の方々が、研究の進展にさまざまな形で貢献して下さったことなどである。そして、5 年間、自分に優しく、他人に厳しい研究者の集団を支え、間違いなく研究が進むように配慮して下さった COE 支援事務室の皆さんはじめ、神奈川大学関係者の皆さんにあつくお礼を申し上げたい。